

都道府県・指定都市番号	60	都道府県・指定都市名	大阪市	研究課題番号・校種名	2 (4) 小学校
				領域名	ESD
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (4) ESD を学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	おおさかし りつ みなみしょうがっこう 大阪市立南小学校 (174 人)				
所在地 (電話番号)	〒542-0083 大阪府大阪市中央区東心斎橋 1-14-29 (06-6252-6825)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e551131&frame=frm58b629b27b833				
研究のキーワード	・多文化共生 ・地域学習 ・国際理解教育 ・主体的・対話的な学び ・ESD の評価				
研究結果のポイント	<p>○ 教科等横断的な学習活動を組み立てたことにより, 教科学習の中に ESD に関わる価値観や身に付けたい力や態度を見いだすことができ, 「みなみ ESD カリキュラム」として整理できた。</p> <p>○ 主体的な学びを構成するために「対話的な学び」と「行動に向かう学び」に重点を置いた。意見交流の場の設定の工夫によって, 子供たちの学びに対する意欲が高まった。また, 学習内容を 4 次構成にすることによって「行動に向かう学び」をより効果的に進めることができた。</p> <p>○ 横断的に扱っている単元の学習目標・評価規準と ESD に関わる価値観, 身に付けたい力や態度と照らし合わせて, 「みなみ ESD カリキュラム」の評価規準として独自に設定した上で学習活動を進めることができた。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

学びに向かう力の育成をめざして～未来を見つめる心を育む～

(2) 研究主題設定の理由

本校は, 在籍数の約 4 割が外国籍若しくは外国につながるのある子供たちである。国籍も多様で, 現在は 10 か国の子供たちが学んでいる。他国からの編入も多く, 日本語指導を必要とする児童に対する学習支援を行うための日本語教室が自校内に設置されている。また, 明治 5 年開校の歴史を持つ四つの小学校が統合されてできた学校でもあり, 地域とのつながりも深く, 地域の人々との交流も多い。こうした様々な要素が交じり合う本校において, 多様な価値観が尊重され, 多様な立場にいる児童が安心して過ごすことができる多文化共生の学校を目指すために ESD の学びを推進し, 多様性を尊重し協働しながら学び合うことへの意欲を高め, 未来に対する積極的な行動力を育むことが必要であると考え。

そこで, 本研究においては, 本校に在籍する様々な背景を持った児童一人一人が社会に対する希望を持ち, 未来に対する当事者意識を育む学習活動の在り方を追求する。

(3) 研究体制

【研究推進委員会】—【研修部】—【各学年部】

└─【日本語指導】【特別支援教育】【ことばの教室】

【外部有識者との連携】・・・大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム

(4) 2年間の主な取組

平成28年度	<p>【1学期】</p> <ul style="list-style-type: none">・研究全体会：研究の概要・理論研修会：大阪府立大学大学院 准教授 伊井直比呂先生・国際理解教育研修会・学習活動案の作成：指導案検討会（1～6年生） <p>【2学期】</p> <ul style="list-style-type: none">・理論研修会：国立教育政策研究所教育課程センター 西川さやか担当調査官・授業研究会・研究討議会の実施：2～6年生 <p>【3学期】</p> <ul style="list-style-type: none">・人権教育研修会：文部科学省初等中等教育国際教育課 近田由紀子先生・授業研究会，研究討議会の実施：1年生・研究全体会：研究のまとめ
平成29年度	<p>【1学期】</p> <ul style="list-style-type: none">・研究全体会：研究の概要・理論研修会：大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム特任准教授榎井縁先生・学習活動案の作成：指導案検討会（1～6年）・授業研究会・研究討議会の実施：1～6年 <p>【2学期】</p> <ul style="list-style-type: none">・学習活動案の作成（公開授業用）：指導案検討会（1～6年）・国立教育政策研究所教育課程研究指定校研究発表会：公開授業/研究報告/講演 <p>【3学期】</p> <ul style="list-style-type: none">・大阪市中心区教員研究発表会・研究全体会：研究のまとめ

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ESD を学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに課題を見だし、それらを解決するために必要な力や態度を児童に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法・評価などの工夫改善に関する実践研究

- ① 学校の特色を生かしたESDの学び：国際理解プロジェクト・地域学習プロジェクト
- ② 教科等横断的な学習活動の開発：ESDカリキュラム
- ③ 主体的な学びに適した学習活動の構成：対話的な学び・行動に向かう学び
- ④ ESDの評価方法

(2) 具体的な研究活動

- ① 学校の特色を生かしたESDの学び / 教科等横断的な学習活動の開発

「国際理解プロジェクト」と「地域学習プロジェクト」の二つのプロジェクトを教科等横断的に取り組み、ESDカリキュラムとして体系的に整理することで、ESDの視点に立った学びを推進するようにする。

【国際理解プロジェクト】

世界の様々な国々の文化や習慣に対する興味・関心を養い、異なる文化背景を持つ人々との協働作業に取り組もうとする態度を育む。低・中学年においては、日々、共に学校生活を送っている友達の文化的・習慣的な差異を科学的に捉え、理解する学習活動をすすめる。高学年においては、世界で起きている様々な課題に目を向け、全ての人々が安心して暮らせる社会の実現に向けて、自分たちにできることを模索しようとする態度を育む。

【地域学習プロジェクト】

自分たちの町の特徴を知り、地域の人々が守り育ててきたものや思いを知ることを通して、自分たちの町に愛着を持ち、自分たちが将来の町の担い手となることを意識できるようにする。これまで、地域の人々と共に積み重ねてきた学習の持続的な発展を目指す。

② 主体的な学びに適した学習活動の構成

主体的な学びを構成するために、「対話的な学び」と「行動に向かう学び」の二点に重点を置いた学習活動計画を立てる。特に、「対話的な学び」については、話し合いの場の工夫を通して、どの子供も安心して取り組むことができる環境を整え、できるだけ多くの意見を交流することができる方法を提案する。

【対話的な学び】

学習活動において、次の方法をとることで、様々な場面での対話が生まれるようにする。

- 参加型のアプローチ（体験・話し合い活動の工夫）
- 実地調査（学校探検・町探検・インタビュー活動・アンケートなど）
- 友達と協力して進めるグループ活動を主体とした学習活動

【行動に向かう学び】

地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分たちができることを考え、多様な人々と協働し実践しようとする力や態度を育むことを目指す。扱う題材について課題意識を持ち、調べる学習や意見の交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりしながら、持続可能な社会を目指そうとする学習の流れを4次構成の学習活動計画として組み立てるようにする。

- 1次：関心の喚起
- 2次：理解の深化
- 3次：参加する態度・問題解決能力の育成
- 4次：行動につながる学習活動

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">○ 教科学習の中に ESD に関わる価値観や身に付けたい力や態度を見いだすことができ、「みなみ ESD カリキュラム」として整理できた。○ 意見交流の場の設定の工夫によって、子供たちの学びに対する意欲が高まった。○ 学習内容を4次構成で教科等横断的に組み立てることによって「行動に向かう学び」をより効果的に進めることができた。 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

- 教科等における各単元の学習目標を見極め、効果的な組み合わせを考え、教科等横断的に組み立てることにより学習効果の高い学習活動計画を作成（又は立案）することができた。
- 地域で働く人や学校の教育活動に関わりが深い人、保護者など、子供たちにとって身近な人たちとの交流を学習活動の中に取り入れることで学習に対する意欲が高まる様子が見られた。
- 「世界につながる」題材が友達につながる国であったり、教科書で扱われていたりするなど、子供たちが身近に感じることができる国や地域の文化や習慣を扱うことが子供たちの「もっと知りたい」につながった。
- ロールプレイやシミュレーション、KJ法、ウェビングといった参加型のアプローチは、子供たちの主体的な学びを引き出すきっかけにすることができた。
- 横断的に扱っている単元の学習目標・評価規準とESDに関わる価値観、身に付けたい力や態度と照らし合わせて、「みなみESDカリキュラム」の評価規準として独自に設定した上で学習活動を進めることができた。
- 効果的な学習活動計画を組み立てるためには、教育課程全体を見通して計画を立てる必要があるため、カリキュラム・マネジメントが必要不可欠な取組になる。
- 学習活動を継続して取り組むことができるようにするために、使用した資料や連携した団体やゲストティーチャーなどに関する情報を常に共有する必要がある。
- ESDに関わる価値観をそれぞれの教科等の単元から見だし、授業立案者が評価規準を設定し直す作業には、時間と手間がかかり、学習活動を計画する上での負担となった。
- 「みなみESDカリキュラム」の学習目標を明確に設定し、発達段階に応じた評価規準を設定する必要がある。

4 今後の取組

本校は、現在ユネスコスクールへの加盟申請中である。この2年間で開発した二つのプロジェクトをESDカリキュラムとして本校の教育課程の中心に据えるためのカリキュラム・マネジメントを行い、認可に向けての準備を行うようにする。そのためには、この2年間で開発した学習活動を精査し、より効果的に取り組むための指導法や学習活動計画の在り方についての研究を引き続き行う必要があると考える。年間の学校行事や各教科等の指導計画を見通した上で、指導時期や指導内容についての共通理解を図り、ESDカリキュラムが本校の学校文化として根付く仕組みを作っていく。

また、ESDの理論を実践に結び付けるためには、枠組みが必要である。指導者が授業を立案するための手立てが明確になることにより、学習活動計画の立案にかかる時間と手間が削減され、よりESDに取り組みやすくなると考える。この2年間で研究結果を基に、本校におけるESDの学習目標や評価規準、評価方法を確立できるようにしたい。さらに、こうした本校の取組をできるだけ多くの学校関係者と共有していくことで、ESDに対する認知を広げていきたい。